

異年齢交流の中で育つ思いやりと責任感

校長 相川 保 敏

本校では、家庭や地域でも異学年での交流機会が減少している時代だからこそ、学年をこえた関わりを大切にし、日々の学校生活の中で思いやりや協働の心を育てています。縦割り清掃や行事など、異年齢で関わる機会を多く設けることで、上級生は下級生を支える喜びと責任を学び、下級生は上級生の姿に安心感と憧れを抱きながら成長していきます。学校が大切にしている「人を大切にし、人と支え合える力」は、このような日常の積み重ねの中で育まれています。



本年度も1年生と6年生のレゴランド遠足が4月24日に行われました。この遠足では、6年生が1年生と班を組み、レゴランド内を回りました。6年生は1年生と手をつなぎ、歩幅を合わせ、やさしく声をかけ1年生の要望を聞きながら行動していました。まだ学校生活に慣れ始めたばかりの1年生にとって、6年生は信頼できる優しいお姉さんとして心強いものだったことでしょう。帰りのバスの中で、「校長先生、今日はとても楽しかった」と何度も話してくれました。1年生にとってこの遠足での学びが、学校への信頼感につながっていくものと考えます。

一方で、6年生にとっても、この遠足は大きな意味をもつ行事です。年下の子に合わせて歩くこと、困っていないか気を配ること、不安にならないよう声をかけることは、どれも相手の立場に立って行動する力を必要とします。ただ「連れて行く」のではなく、「楽しく安全に過ごしてもらおう」ことを考えて行動する中で、最上級生としての自覚や責任感が育っていきま

す。1年生のために動く経験は、6年生自身の成長を促し、自分が学校を支える一員であるという誇りにもつながります。6年生は「1年生の時に、6年生のお姉さんがとても親切にしてくれた。今日は私たちが1年生のお世話をして、1年生に喜んでもらいたい」と話していました。本校では、こうした優しさが伝承されていることを大変うれしく思いました。

また、こうした遠足での温かな関係は、遠足当日だけに生まれるものではありません。1年生と6年生は学校探検でも一緒に活動しており、名刺交換をした後、手をつないで校内を回り6年生が1年生の活動を促しながら学校のことを案内しています。また、6年生は、朝の準備や給食、掃除のお手伝いなど、学校にまだ慣れていない1年生のお世話も日頃から担っています。こうした日常の関わりがあるからこそ、遠足でも自然に相手を思いやり、寄り添う姿が見られるのだと思います。行事は特別な体験であると同時に、日頃の学びの成果があらわれる場でもあるのです。

本校では、1年生と6年生だけでなく、冒頭述べたように、異年齢による交流活動を重視しています。これからも学年をこえた温かなつながりを大切にしながら、学力だけでは測れない大切な力を子どもたち一人ひとりに育てていきます。

今回のレゴランドの遠足は、4月25日中日新聞市民版にも掲載されました。この取り組みは「レゴランド・ジャパン」の「つなGOスタートカリキュラム」として行われています。新1年生が上級生と親睦を深め、学校生活に慣れるきっかけになるように3年前から行われている活動です。費用は「レゴランド・ジャパン」が負担している取り組みで、学校として深く感謝するとともに、今後も継続されていくことを願っています。